麗澤大学 Reitaku University

2026-07-18 (Sat.) 日本高校教育学会 第33回大会

人間とAIが共生する時代の高校教育はどこに向かうのか

年報33号の巻頭言を出発点として

発表資料はこちらから参照できます
https://zono.e4serv.net/shelf/jsshse33.html

麗澤大学 国際学部

NAKAZONO Nagayoshi

中園 長新

nnakazon@reitaku-u.ac.jp

本研究は、JSPS科研費JP21K02864/JP25K06475の助成を受けたものです

本発表の資料

- 『日本高校教育学会年報』第33号
  - 巻頭言（pp. 2–3）

- 発表原稿＆スライド（どちらでも同一）
  - 大会共有フォルダ
  - 発表者提供サイト（右記QRコード）
    https://zono.e4serv.net/shelf/jsshse33.html

  - 発表者提供サイトのみ「生成AIが自動生成したスライド」も掲載

Summary?

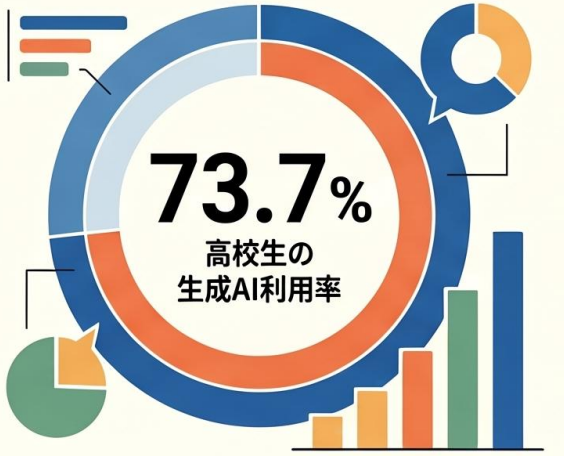
Google NotebookLMによる自動生成

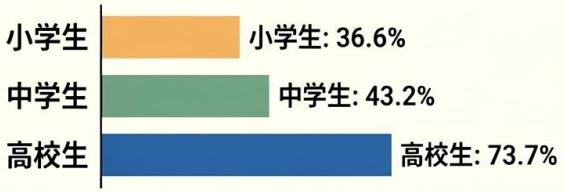
人間とAIが「共生」する高校教育の未来

AIの普及により、高校生の7割以上が日常的に生成AIを利用する時代が到来しています。
本資料は、AIを排除するのではなく、互いの違いを認めつつ対等な関係を探く「共生 (Kyosei)」の視点から、これからの高校教育が目指すべき方向性を提案します。

AI 浸透の現状と教育の転換

2025年の調査で、高校生の73.7%が対話型生成AIを利用している実態が判明。





「排除」から「適切な関わり」へ

AIを奪い取ることは不可能であり、日常生活に溶け込む「当たり前」の存在として扱うべき。

AIリテラシー

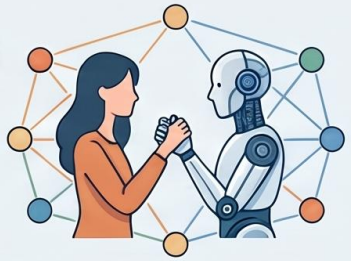
ハルシネーションを見抜く

人間にはAIを使いこなす高度な知恵と批判的思考が必要。

目指すべき「共生」の形

社会学的「共生」の実現

「違いを認めること」と「共に在ること」を両立し、AIを社会の一員として受け入れる。



学びの「伴走者」としてのAI

AIを万能の道具ではなく、共に学ぶ「クラスメイト」や「アシスタント」と捉える。

高校における体系的な学び

仕組みの理解に加え、ELSI（倫理的・法的・社会的課題）に関する議論を教育に取り入れる。

NotebookLM

Summary

- 人間とAIが共生する時代において、高校教育が目指すべき方向性を検討
  - 教育分野にもAIが普及　→　推進と懸念のジレンマ
- 人間とAIの「共生」
  - 対等な存在として尊重し合う関係
  - AIを絶対的で完璧な教師として位置づけるのではなく、学びの伴走者のような意識で向き合う
- 「生成AIとは何か」を学ぶ機会が必要
  - ELSI（倫理的、法的、社会的課題）教育の可能性

AIの発展と普及

- AIの急速な発展・普及
  - Web検索してもほぼ自動的にAI回答が表示
  - もはやAIとの関わりを避けることができない時代
- 教育分野にもAIが普及 → 推進と懸念
  - e.g.) 東京都「都立AI」
  - 対話型生成AIの利用： 小学生36.6% 中学生43.2% 高校生73.7%
  - 否定的意見も多い
  - 文科省「初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン（Ver.2.0）」

問題提起と研究の目的

- 我々はAIとどのような関係性を構築し、どのような教育を目指していくべきか
  - 高校教育を主なターゲットとし、「共生」の観点から検討

- 教育の領域として高校教育を主たる研究対象として、人間とAIが共生する時代において教育が目指すべき方向性を検討することを目的とする
  - 具体的な方向を結論づけるのではなく、今後の議論を進めていく拠り所として、一つの方向性を提案することを意図

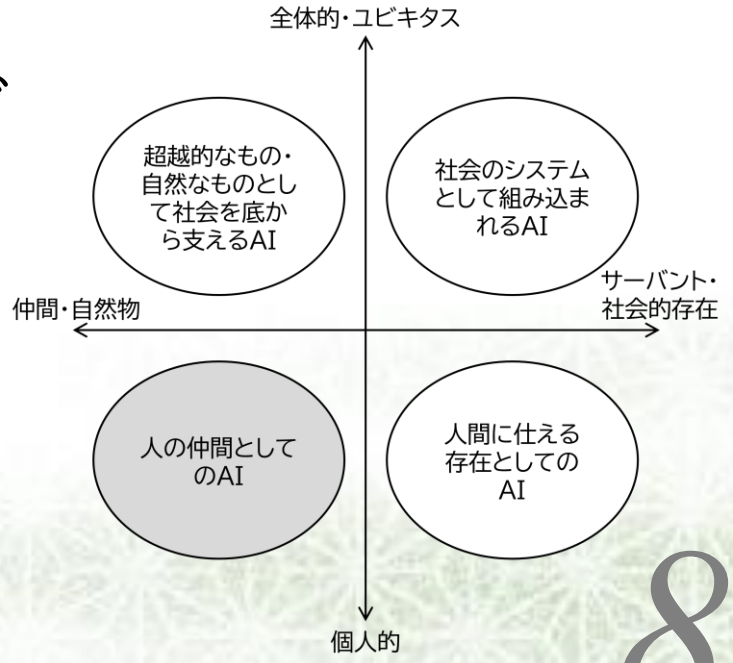
共生とは何か

- 社会学的な「共生」（kyosei）を考える
- 岡本・丹治（2016）における定義（抜粋）
  - 「共生」とは、「あるもの」と「異なるもの」の関係性を対象化し、両者を隔てる社会的カテゴリ（社会現象を整序する枠組み）それ自体を、いまあるものとは別なるものへと組み直す現象である。
  - そのようにして新たに組み直された認識枠組みもまた、なんらかの排他性を帯びることを避けられないが、その「排他の事実」を認めつつ、暫定的なものとしての社会的カテゴリの更新をかぎりなく重ねていくことが、行為者水準における社会的共生のプロセスである。

岡本智周・丹治恭子編著『共生の社会学：ナショナリズム、ケア、世代、社会意識』太郎次郎社エディタス、2016年
岡本智周編著『多様性と凝集性の社会学：共生社会の考え方』太郎次郎社エディタス、2025年

人間とAIの共生

- 人間とAIがどのように異なっているかを認めると同時に、人間とAIが対等な存在として共に生きるとはどういうことなのかを考察
  - どちらかがもう片方を支配したり使役したりする関係ではなく、反差別的で尊重し合う関係を構築
  - 現状では、人間はAIに対して「管理していなければ何をしでかすかわからない」という意識
  - 発展途上であることを理由にAIの立場を下に見ることは適切な態度と言えるのか？



画像出典：三宅陽一郎『人工知能が「生命」になるとき』PLANETS／第二次惑星開発委員会、2020年を元に色彩等を調整して筆者作成

AIによる教育の変化

- 膨大な知識をもつAI vs. 人間の記憶・知識
  - 教員が教科書を教えて生徒が知識を覚え込むような、
    旧態依然とした学びはますます価値を失っていく
  - もはや知識やスキルを習得することに価値を見出す必要はなく、
    AIを外部記憶あるいは便利ツールとして侍らせればよい？
- AIと共生する時代の人間は、
  これまで以上に多くの知識や知恵が求められるようになる

なぜハルシネーションを許せないのか

- 「間違える」のはAIに限った話ではない
- 潜在的にAIを「絶対的で万能の力を持った道具」と見なしていることに起因？
  - AIが間違える可能性から目をそらし、万能の存在として捉えている
- 共に社会を創っていく仲間であると考えたらどうか
  - 同じ社会を生きる存在として、互いを認め尊重する関係
  - 教育の文脈では「共に学ぶクラスメイト」「学びをサポートしてくれるアシスタント」
  - AIを絶対的で完璧な教師として位置づけるのではなく、学びの伴走者のような意識で向き合う
    →ハルシネーションに激怒しない／回答を鵜呑みにせず反芻

AI時代の高校教育の方向性

- 生成AIを使うことが当たり前の生徒が多数派
- 初等中等教育においてAIについて体系的に学ぶ機会は設けられていない
- 学習段階のどこかで、「生成AIとは何か」を学ぶ機会が必要
  - 共通教科情報科を擁する高校において、発達段階を踏まえながらAIについて体系的に学ぶことには価値がある

AI活用が期待できる学習場面の例

- 一問一答や検索的に使うのではなく、対話から生成AIの利点を引き出すような、より高度な使い方ができるのではないか
  （みんなのコード 2023）
  - e.g.) 生成AIとのディベート
- AIに関するELSI（倫理的、法的、社会的課題）を考える
  - 技術に対する法整備が追いついておらず、倫理観醸成も不十分
  - AI倫理に関する教育の可能性

高校でのELSI教育実践例

- 系列校で高大連携授業を実施
  - AIが普及する時代において私たちの哲学・倫理はどのように変わるのか、先端技術を活用する際の倫理的・法的・社会的課題は何なのかを考える
- 授業で用いた問い
  - 友人の宿題を写して提出することは善か悪か？
  - 写す際に対価を要求して双方納得の上でやりとりしたとしたらどうなる？
  - トロッコ問題をAIはどのように判断すればよい？
  - 完全自動運転の車が事故を起こしたときの責任の所在は？

https://www.reitaku-u.ac.jp/news/research/1778587/

麗澤大学 Reitaku University

TOP ＞ お知らせ ＞ 【開催報告】情報・データサイエンス教育センターの教員が麗澤高校で高大連携授業を実施

お知らせ

教育・研究 2026.07.01

【開催報告】情報・データサイエンス教育センターの教員が麗澤高校で高大連携授業を実施

2026年6月18日（木）に、情報・データサイエンス教育センターの中園長幹准教授（国際学部所属）が、麗澤高等学校において高大連携授業を実施しました。

この授業は麗澤大学と麗澤高校の高大連携の一環として、情報・データサイエンス教育センター所属教員が分担して、高校2年生の選択科目「情報Ⅱ」のゲストティーチャーとして授業に参加するものです。初回となる本授業では「人間とAIの共生社会におけるELSI（エルシー）：AI時代の哲学・倫理を考える」というテーマで、AIが普及する時代において私たちの哲学・倫理はどのように変わるのか、先端技術を活用する際の倫理的・法的・社会的課題は何なのかを考えました。

授業では「友人の宿題を写して提出することは善か悪か？」「写す際に対価を要求して双方納得の上でやりとりしたとしたらどうなる？」「トロッコ問題をAIはどのように判断すればよいか？」「完全自動運転の車が事故を起こしたときの責任の所在は？」などの問いが提示され、生徒はグループごとにいろいろな視点から意見を出し合っていました。中園准教授は、いずれの問いに対してもさまざまな視点があって簡単に善悪が決まらないことや、AIの登場によって私たちの考えている「責任」という概念が変化しつつあることなどを紹介しました。授業の最後には「人間とAIの共生」に触れ、AIが知能や知性を持つかどうかにかかわらず、共に生きるためには倫理観や道徳観を検討しなければならないことが示されました。

情報・データサイエンス教育センターによる高大連携授業では、今後はプログラミングなどの工学的な演習を実施予定です。そのような演習に先立つ今回は、技術を活用する際に必要な倫理観を考えることができる授業でした。

麗澤大学では、系列校である麗澤高等学校や麗澤瑞浪高等学校をはじめ、全国の様々な高等学校と高大連携を実施しています。また、連携していない学校においても、ご依頼いただければ出前講義などが可能です。講師などをお探しの際は、お気軽に大学入試・広報課にご相談ください。

高大連携の詳細につきましては、こちらのページをご覧ください。

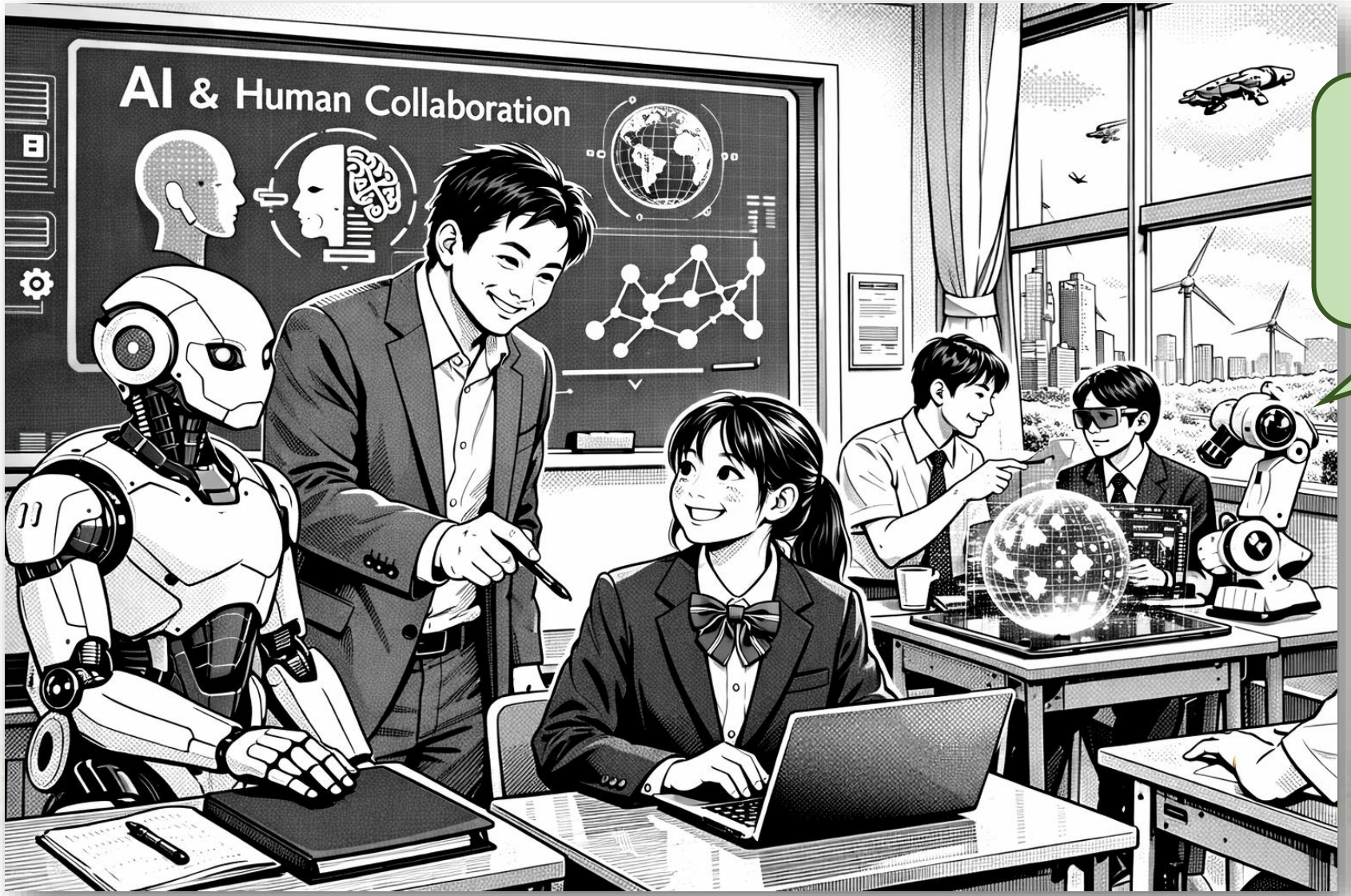
※ELSI（エルシー）：倫理的・法的・社会的課題（Ethical, Legal and Social Issues）の略で、先端技術を開発したり社会実装したりする際に検討すべき課題のことを指します。

公式LINE
オープンキャンパス
AIに質問

これからの高校教育に向けて

- これからの社会はますます多様化し複雑化し、その社会を生きていくための教育は人間だけの力では実現不可能に
  - 人間とAIが共生し、助け合いながら学んでいく状態が、目指す教育のあり方ではないか
  - 教育に対する考え方を大きく変容させたり、人間とAIの関係性を包摂した哲学・倫理が必要だったり、法的な整備が必要だったりする
- そもそも「人間とAIの共生」とはどのような関係性を指すのか、共通認識を確立させることも必要

「人間とAIが共生する時代の高校教育」？



これが
理想の姿か？

画像：ChatGPTによる生成

麗澤大学 国際学部
中園 長新（NAKAZONO Nagayoshi）
nnakazon@reitaku-u.ac.jp

Summary（再掲）

- 人間とAIが共生する時代において、高校教育が目指すべき方向性を検討
  - 教育分野にもAIが普及 → 推進と懸念のジレンマ
- 人間とAIの「共生」
  - 対等な存在として尊重し合う関係
  - AIを絶対的で完璧な教師として位置づけるのではなく、学びの伴走者のような意識で向き合う
- 「生成AIとは何か」を学ぶ機会が必要
  - ELSI（倫理的、法的、社会的課題）教育の可能性